初心者に対する指導方法についての考察
― ブルクミュラー 25の練習曲を題材として ―

A Study of Teaching Methods for Beginners:
Through Johann Friedrich Franz Burgmüller's 25 Easy Etudes

中 村 愛
Ai NAKAMURA

【要旨】

幼稚園教諭、保育士を目指す学生の多くは、幼児教育の中でも重要な位置を占める、音楽の基礎的な力をつけるため、ピアノの習得に取り組んでいる。本研究では、限られた時間の中で、ピアノを一から学ぶピアノ初心者に焦点を当てて、初心者が陥りやすい演奏の傾向を踏まえて、音楽的に演奏をするために、何を考えて取り組めば、最も良い成果を上げる事が出来るのかを、具体例を挙げて示した。楽譜の読み方を、バイエルピアノ教則本等で学び終え、次の教則本として、学生が使用することの多い、ブルクミュラーの25の練習曲を題材にして、楽譜から自分の力で音楽を読み取り、人前で演奏するために必要な事を考察した。

キーワード：ピアノ指導法、ピアノ初心者、ブルクミュラー

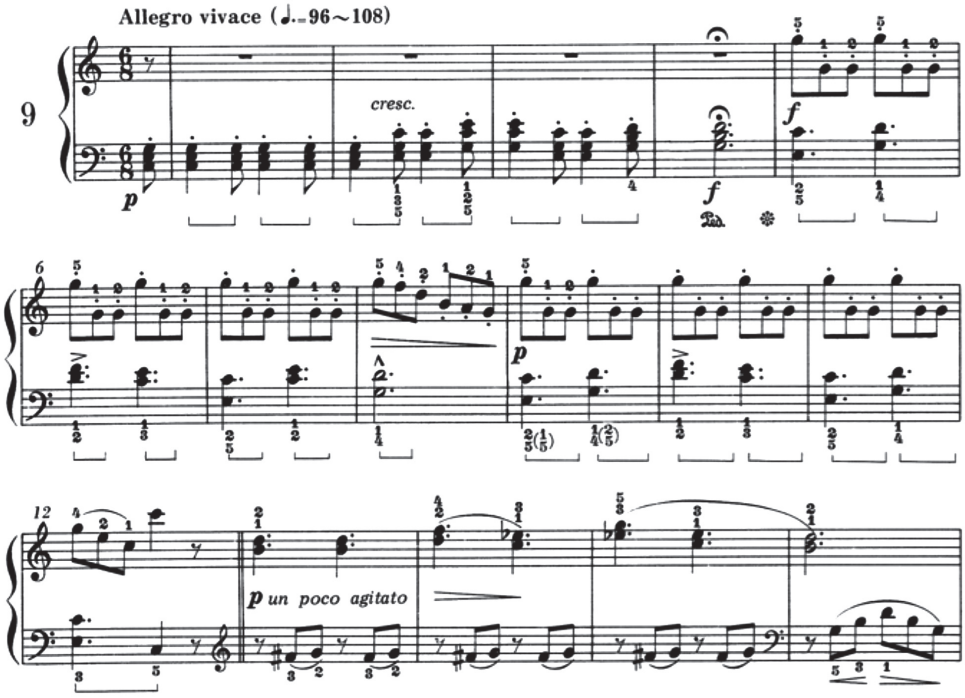
Ⅰ はじめに

幼児教育を専門として学ぶ人の多くがピアノを学んでいる。幼稚園など、実際に現場で使われる童謡だけでなく、楽譜の意味などの基礎的な事を学ぶために、ピアノ教則本に取り組む機会も多い。

これまでの日本のピアノ教育においては、初心者はまず、バイエルピアノ教則本（以下、バイエル）から取り組み、ブルクミュラーの25の練習曲（以下、ブルクミュラー）を経て、ソナチネアルバムに進むという流れが一般的であった。現在のピアノ教則本は、挿絵が多く、カラフルなもの、テレビで聴いたことのあるメロディーを簡単に編曲したものなど、子ども達がピアノに親しめるよう様々な工夫がされており、数多く出版されている。ただ、それらの教則本の多くは、子ども達がじっくりと長い時間をかけてピアノを習得するのには向いているが、数年で、ある程度のレベルに到達するのには向いているとはいえないだろう。そのため、現在でも、幼児教育に携わろうと学ぶ学生が、バイエルで楽譜のルールを学び、ブルクミュラーやソナチネアルバムを通してピアノを学んでいることが、養成校へのアンケート調査をみてもうかがえる（小倉、2013）。学校の試験だけでなく、現場の採用試験でもこれらの教則本を弾く機会が多くあり、学生のピアノのレベルを判断する材料として使われている。それならば、これらの教則本を弾きこなし、より良い演奏を披露できるように、特に今回は、ピアノ初心者を念頭に置いて、音楽的にも技術的にも、バイエルより一

歩進んだ教材であるブルクミュラーを題材に考察することにした。

Ⅱ　テンポについて



譜例１　第９番「狩」第１-16小節　全音楽譜出版社版

譜例１の冒頭にもあるように、ブルクミュラーの各曲には、それぞれ、メトロノームで速さが指示されている。初版のテンポは速すぎるとされ、全音楽譜出版社版（以下、全音版）、ウィーン原典版に基づく音楽乃友社版（以下、ウィーン原典版）ともに、校訂者による適切なテンポが記されている。まずは、この適切なテンポを参考にして練習に取り掛かり、速さに気を取られて、丁寧さが失われないようにしなければならないだろう。中村（2014）で、旋律を実際に声に出して歌うことによって、きっちりと間をとり、音楽的に弾く事の大切さについて考察したが、歌詞のない教則本でも同じ事が言えるのではないだろうか。

譜例１の、この曲の４小節目には、フェルマータがつけられている。そのため、その指示通りに次に備える準備の時間を取らなければならないと多くの人が考えるので問題ないのだが、12小節目はどうだろう。もちろん、フェルマータの指示がないので、間が長すぎるのはふさわしくないが、ほとんどの学生は、あまりにも次に向かって急いでしまい、音を外してしまう事が多い。次の小節から、明らかに曲の雰囲気が変化するのであるから、音楽の流れを止めないように気を付けながら、慌てずに弾いた方が良い。agitato（せきこんで）の、前へ進んでいく表現がより効果的になり、聴いている人に良い演奏として印象に残る可能性も高まる上に、音も外れにくくなるだろう。

他にも、この曲の28小節目は、29小節目からの長くゆったりとしたメロディーへの転換を、急で

はなく、自然に流れるように感じさせるために落ち着いた方が良い箇所がある。また、36小節目、44小節目にも、同じように次の小節からの変化に備えて、慌てずに間をとった方がいい部分が存在する。

このように、歌詞の無い教則本の曲であっても、常に旋律を歌って呼吸をしていれば、はっきりとした指示はなくても自然な間を感じることが出来るという事を、学生と一緒に声を出して確かめていきたい。

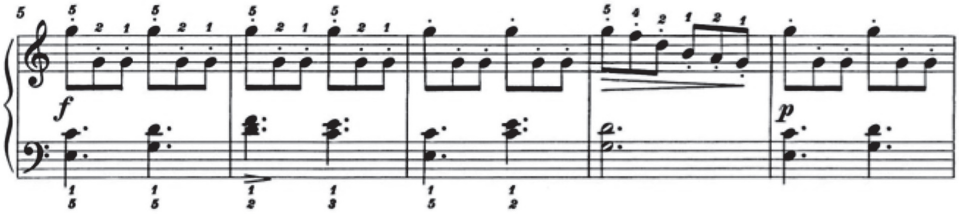
テンポを崩さないで演奏するという事は、メトロノームにきっちり合わせられるようになる事ではなく、むしろ、適切な間を歌うことで感じ、表現することではないだろうか。

また、ブルクミュラーの各曲には、rallentando（次第に遅く）、ritenuto（今までより遅く）など、速度の変化を表す用語も多く記され、perdendosi（次第に遅く弱く）の様に、速度に加えて強弱にも影響する用語も書かれている。これまで、テンポ通りにきっちりと演奏することが目標であった学生に、一歩進んで、自分でテンポをコントロールし、主導権を握って演奏する楽しみに気づいてもらえるよう、そのきっかけとなるような指導が望まれるだろう。

Ⅲ　指使いについて

指使いは、ピアノを演奏するにあたって、重要な位置を占めている。指使いによって、その演奏が良くなるかどうか決まってしまう事さえある。親指、小指など、指１本１本それぞれの個性が大きく異なるため、どういう表現をしたいかを考えて指使いを決めなければ、どんなに練習をしても、イメージ通りの効果を引き出すことができないことさえある。

今回は、初心者のために、主に技術的な問題を解決する方法を考えていきたい。



譜例２　第９番「狩」第５- ９小節　ウィーン原典版

譜例１でみられるように、全音版の５～７小節目の右手の指使いは、512の連続となっている。対して、譜例２のウィーン原典版の同曲の同小節の右手の指使いは、521と記されている。

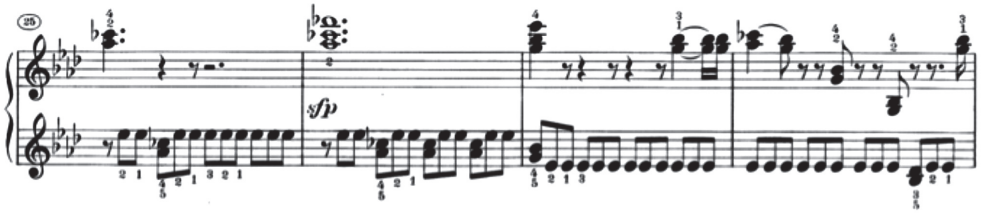
譜例１の全音版の指使いは、オクターヴはとりやすいのだが、親指にアクセントがつくため、大きな音になりやすく、両手のバランスがとりにくくなり、聴かせたいはずの左手のメロディーをかき消してしまいやすい。

譜例２のウィーン原典版の521の指使いは、ウィーン原典版の校訂者が「学習のための助言」で述べている通り、作曲者が書いた指使いの可能性が高いとされているのだが、オクターヴを52でとる指使いを使うのは簡単ではない。本来、作曲者の考えは尊重されるべきであり、理由もなく変えてしまう事は避けるべきであるし、一度は挑戦して努力してみるべきであろう。小指で弾かれる高

いソの音を、少し独立させて目立たせる効果もあり、難しい指使いが無意味に書かれているわけではないからである。

このように、どちらの指使いも、良い面と考慮すべき点がある。学習者が、その実力に応じて選択すればよいのだが、初心者の場合は、同音の指を変えずに、511の指使いを使い、さらに技術的に楽にすることを考えてもいいように思われる。なぜなら、そのことによって左手に余裕が生まれ、メロディーを浮き立たせることが出来るようになるのであれば、曲の伝えたい事を、自分の今の実力で伝える方法としては間違っているとは言えないだろう。

単に技術的に楽をするためだけではなく、音楽的に必要であれば指使いを変えても良いと考える根拠として、初心者が取り組む曲とはいえない、ベートーヴェンのピアノソナタ第23番をみてみたい。

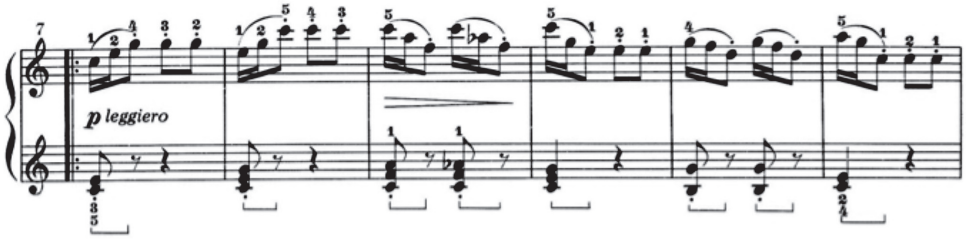


譜例３　「ピアノソナタ　第23番」第１楽章　第25-28小節 ヘンレ版

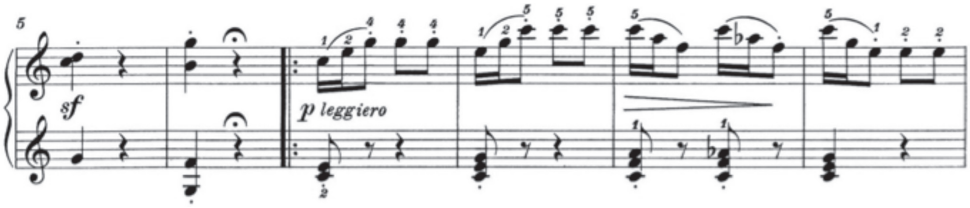
このピアノソナタの第１楽章には、譜例３に示した小節だけでなく、同音連打が数多く書かれている。ヘンレ版だけでなく、多くの版で、指を変えるよう指使いが書いてあるのだが、この楽章のように、かなりの速さを求められ、前へ前へと一瞬も止まることなく進んでいくことが重要なポイントだと演奏者が感じた場合、同じ指で演奏してもよいと筆者は考える。「熱情」ソナタとして広く知られているこの曲で、何が大切なのか、何を聴かせたいのかを考えて指使いを決めていくという、積極的な姿勢が求められるのではないだろうか。

このように、技術的な問題を解決するためだけでなく、音楽の何を伝えたいかによって、指使いにもいろいろな選択肢があることを学生が知ることで、楽譜をしっかりと読み込む力をつけていく勉強につなげていきたい。

ブルクミュラーの他の例をみていこう。



譜例４　第11番「せきれい」第７-12小節　全音版



譜例５　第11番「せきれい」第５-10小節　ウィーン原典版

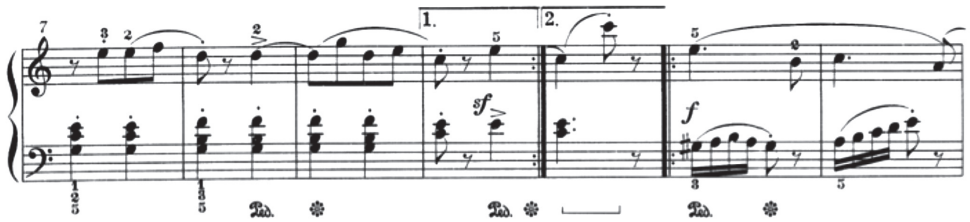
譜例４の全音版では、右手の同音連打の指使いは、違う指を使うように書いてあるが、譜例５のウィーン原典版では同じ指で弾くように書かれている。作曲者の意図した指使いは、同じ指を使う方法である可能性が高い上に、その方が楽なのであるから、同じ指を使う事を推奨したい。ただ、楽に弾けることによって、その部分だけ、テンポが不自然に前に進まないように注意しなくてはならないだろう。リズムに問題がある学生に、リズムを正確に弾かせたいと思い、リズムやテンポを重視して指導するのであれば、特に７小節目のソの音に関しては、譜例４の全音版の指使いも有効かもしれない。

このように、曲の特徴や、最も表現したい事を考慮し、そのために必要な指使いを考える事は、初心者だけではなく、全ての演奏者にとって大切だといえる。指使いを一つ一つ細かく丁寧に見ていく事が、結果的に効率が良く、短い時間で成果をあげられるということを、学生に伝えていく必要があるだろう。

Ⅳ　指のコントロールについて

初心者特有の問題の一つとして、指の弱さがあげられるだろう。子どもの頃からピアノを習ってきた人とは、ピアノの練習にかけた時間が違うため、指の筋肉を鍛えられず、指を１本１本独立させるのが難しいのは当然と言える。

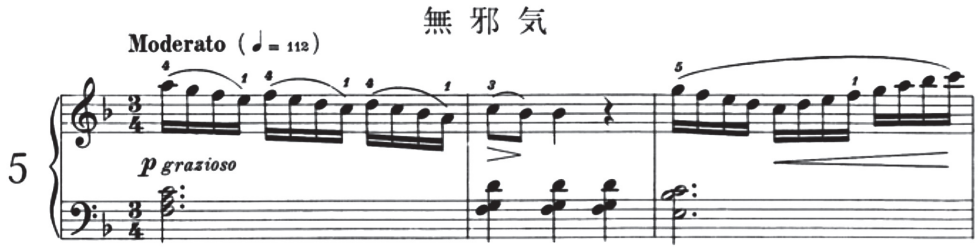
その指の弱さを、なるべく目立たせないような弾き方を考えていきたい。



譜例６　第２番「アラベスク」第７-12小節　全音版

譜例６の11、12小節目、この左手の16分音符は、左手ということもあり、一つ一つの音を独立させて弾くことが非常に難しい。そのため、フォルテ（強く）という指示もあるので、しっかりと力一杯弾いて、なんとか分離させようとしてしまうのだが、強く弾くのは右手の旋律にまかせて、左手は弱く目立たないようにし、スタッカートの様に切って弾く方法を試してもよいのではないだろうか。遅すぎないテンポであれば、右手の旋律が強く弾かれているため、左手は切っていてもなめ

らかさを感じさせる事が可能であり、16分音符の軽やかさも表現することが出来るだろう。



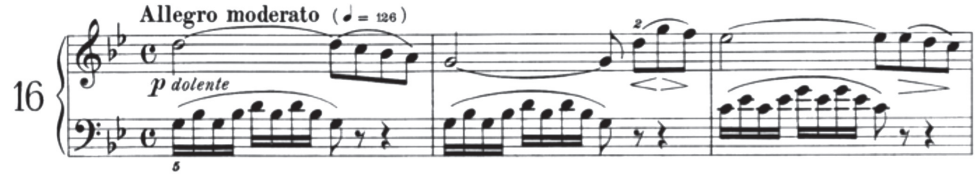
譜例７　第５番「無邪気」第１- ３小節　ウィーン原典版

譜例７の１小節目の右手は、４の薬指から１の親指、すなわち、4321という指使いを使う16分音符の連続だが、弱い指から強い指へと変化するので、初心者が自然に弾くと、人差し指と親指を使う部分だけが強くなってしまい、どうしてもなめらかに聴こえず、たどたどしい演奏になることがある。薬指に重みをかけ、あえて強く弾き、親指に向かって弱くしていくように意識させ、指の弱さをなるべく感じさせないような工夫を助言してもいいだろう。

短期間で、実際に指を強くするのは難しいが、弾き方を工夫することで、その弱点を感じさせないようにすることは可能であり、そのことがより良い演奏につながり、人前での演奏にも自信が持てるようになるのではないだろうか。

Ⅴ　音の聴き方について

ピアノは、両手を使って演奏するため、両手とも違った旋律を奏でられる。そのため、弾く動作に気を取られていると、１つの旋律を聴くだけで精一杯という状態になりやすい。全ての音を聴いて演奏することは、初心者だけでなくピアノを演奏する全ての人々にとって簡単な事ではなく、常に細心の注意を払わなければならない課題だろう。



譜例８　第16番「ひそかな嘆き」第１- ３小節　ウィーン原典版

譜例８の、この曲の冒頭では、右手のメロディーを、左手が16分音符の伴奏で支える形となっている。演奏者は、まず、右手の最初のレの二分音符が、左手の伴奏にかき消されないようしっかりと弾き、両手のバランスが悪くならないように注意する。それから、左手の伴奏のスラーの終わりの音が強く、攻撃的な音になってしまわないように気を付ける、というように、様々な事を一度に考えなくてはならない。この左手のスラーの終わりの音は、ほとんどの学生が強く弾いてしまいやすい部分だが、ここをきっちりと聴いて、丁寧で落ち着いた柔らかい音にすることが出来れば、右

手のメロディーは途切れず、この曲の雰囲気に聴いている人を引き込む事が可能になるだろう。

一度に両手の音を聴く事は難しいので、演奏を録音して、演奏の問題点が何かを探すことから始めてみる方法を提案したい。指導者の演奏とどこが違うのか、自分の力で分かるようになることは、良い演奏というものがどういうものかを理解する近道となるだろう。

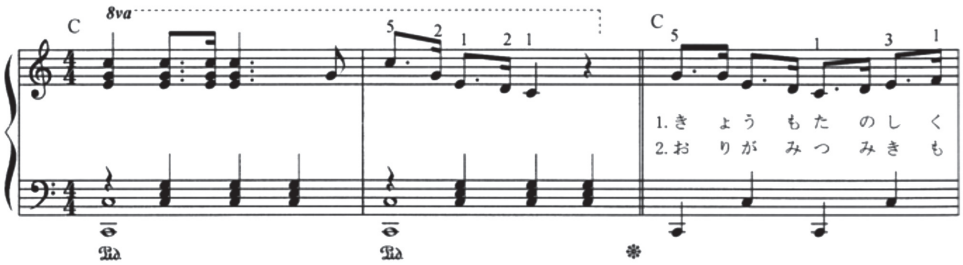
Ⅵ　標題について

ブルクミュラーには、それぞれの曲に標題が付けられている。ここが、バイエルとの大きな違いの一つで、歌詞がなくても曲のイメージを思い浮かべながら練習することが出来る。小森（2010）では、曲に対するイメージをふくらませることで音楽やピアノに対する意欲の高まりがみられる、と述べられているが、単なる記号の連なりと感じていた音符一つ一つの意味を考え想像する事で、曲を物語の様に捉え、自然に曲の構成を意識して演奏する様に、指導者としては導きたい。例えば、譜例４の「せきれい」という標題について、全音版では、校訂者によって「水辺に棲む、形の美しい小鳥で、長い尾をよく上下に動かす」と解説が付けられている。標題が何を意味しているか、学生が知らずに演奏してしまうことのないように考えさせたい。絵本を子ども達に読んであげるときの様に、ピアノ曲にもまた起承転結があり、悲しみ、喜び、怒り、自然の風景の美しさなどを人に伝える事が可能であり、いい演奏とはそれらが多く伝わることだ、という貴重な体験を、ブルクミュラーを通して学べるのではないだろうか。

また、標題だけでなく、曲の中に表現のための用語が数多く記されている。例えば、dolce（柔らかに）、grazioso（優美に）、dolente（悲しげに）などだが、これらは音の間違いに気を取られ、内容について考えずに演奏してしまいがちな学習者にとって、曲の最後まで集中して演奏し、聴いている人を楽しませるのに必要な事は何か、という事に気づかせてくれるきっかけになるだろう。

Ⅶ　ペダルについて

童謡や弾き歌いにおいて、ペダルを使用した方が良い場面は多い。幼稚園・保育園で使われる曲集（本廣ら、2010）から２曲を取り上げる。

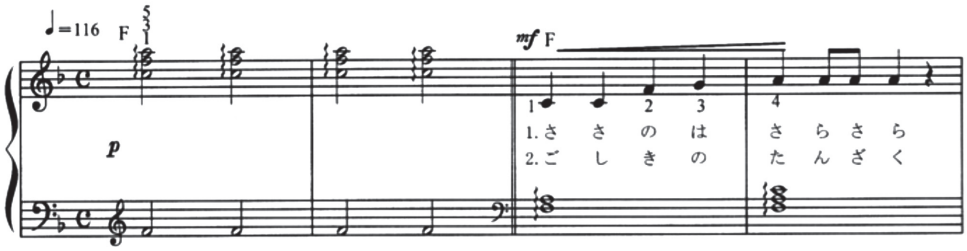


譜例９「おかえりのうた」第１- ３小節

ペダルには、ペダルを踏むことで手の移動を早く開始出来るようになるという利点がある他、譜例９の「おかえりのうた」の１、２小節目のように、左手の最初のオクターヴを指示通り全音符で弾くには、どうしてもペダルが必要な曲もある。もちろん、学習者にとってペダルの使用が難しい

のであれば、使用しなくてすむように変更してもよいのだが、ペダルは、音を指示通り弾くためだけでなく、音楽的な表現のために使われることも多い。

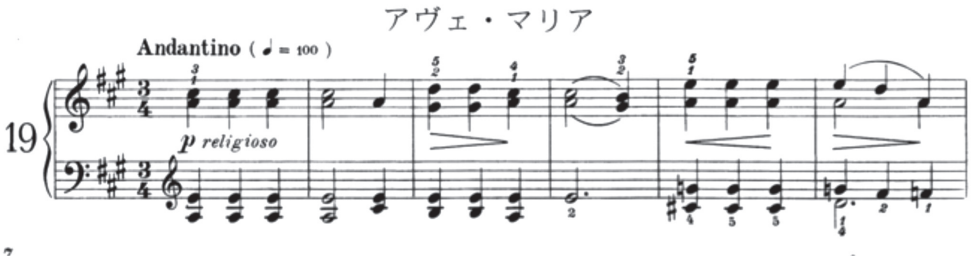
次の譜例10、「たなばたさま」をみてみよう。



譜例10「たなばたさま」第１- ４小節

１、２小節目は同音の連続であり、ペダルを使用すれば音と音の間に隙間が出来ることもなく、正確に演奏出来る。また、同小節の右手の表現は柔らかく、まるでハープを奏でるような表現が適切だが、その表現もペダルを使用することで可能になる。たなばたさまの歌詞にふさわしい表現を目指すのであれば、ペダルを適切に使えるようにするのが望ましいだろう。

ブルクミュラーには、ペダルの練習曲としてふさわしい美しい曲も用意されている。



譜例11　第19番「アヴェ・マリア」第１- ６小節　ウィーン原典版

譜例11の「アヴェ・マリア」は、初心者がペダルを練習する教材として適している。１小節目にreligioso（宗教的に）と書かれたこの曲では、冒頭の同音の和音の連続から曲の最後まで、音が途切れずなめらかに演奏されることが求められていることは明らかであり、良い演奏のためにはペダルの使用が欠かせない。連続した音は繋げなければならないが、音は決して濁らないようにしなければならない。そのため、きっちりとペダルを踏みかえる技術をこの曲で習得させたい。ただ、この曲の21小節目の様に、内声に半音が存在するため、和音に合わせて踏みかえるだけでは濁ってしまう、習得に時間のかかる難しい箇所があるので、学生のレベルに合わせた指導が求められるだろう。

Ⅷ　おわりに

本稿では、大人のピアノ初心者が、どのようにすれば技術的な問題にとらわれず、音楽的な演奏

を目指すことが出来るのかについて、具体的に述べてきた。短期間でピアノを習得することは簡単なことではないが、音を順番に追うだけでなく、ピアノを弾く楽しさ、面白さを学生自らが見つけていけるよう、指導者として一緒に考えていきたい。そのために、技術的に難しくはないが、音楽的で美しい小品集であるブルクミュラーの練習曲の果たす役割は大きいだろう。練習曲として、ピアノの様々な技術を学ぶことが出来る。その上、音楽的に内容があり１曲の長さも長過ぎない。学習者の達成感を満足させる工夫も多く見られるこの曲集で、聴いている誰かを意識して弾くということに挑戦するために必要な事を学べるのではないだろうか。学校の試験や採用試験だけでなく、幼児教育の現場では、常に誰かの為にピアノを弾くことになる。学生に、子ども達とコミュニケーションをとっていくための手段の一つとして、音楽やピアノの必要性や重要性を理解してもらえるよう、これからも初心者の指導法を、様々な角度から研究していきたい。

引用文献

Beethoven, L. V.（1980）Klaviersonaten　BandⅡ　G.Henle Verlag　p.132.

Burgmüller, J. F. F.（1955）25の練習曲　全音楽譜出版社　p. ８, p.13, p.20, p.23.

Burgmüller, J. F. F.（1990）25の練習曲　ウィーン原典版　音楽乃友社　p. ５, p.38, p.42, p.45, p.52, p.55.

小森光紗（2010）創造性豊かなピアノ演奏を目指した実践研究 - J.ブルグミュラー「25の練習曲」を題材として - 埼玉純真短期大学研究論文集　第３号　pp.57-65.

本廣明美・加藤照恵（2010）こどもとたのしく「弾き歌い」幼稚園・保育園のうた　ピアノ伴奏曲集　ドレミ楽譜出版社　p.71, p.80.

中村愛（2014）ピアノ演奏における歌うことの重要性　奈良保育学院研究紀要　第16号　pp.35-44.

小倉隆一郎（2013）幼児教育および小学校教員養成課程におけるピアノ基礎技能テキストの考察　文教大学教育学部紀要　第47集　pp.23-32.